

令和元年度 第2回長野県不登校児童生徒への支援の在り方懇談会(議事録)

- 1 日 時 令和元年12月17日(火) 14:00~16:00
- 2 場 所 長野県庁8階 審問あっせん室
- 3 出席者 別紙「出席者名簿」参照
- 4 あいさつ ○三輪 晋一教育次長
- 5 座長 ○夏目 宏明委員
- 6 協議事項

夏目座長：事務局から基本方針素案の説明をお願いします。

松村課長：「基本方針の位置づけ」「資料1」「資料2」について説明。

夏目座長：続いて、草深さんからお話をいただきたい。

草深さん：緊張している。僕は今年30歳になる。小学校4年から中学3年まで主に学校に行かなかった。草深家は3兄弟で、草深家の7つ上の長男が学校に行かなかった。小学校に入学するとき、幼稚園では「学校へ行くとお友達ができる楽しいよ」と聞いて楽しみにしていたが、僕は3月29日生まれの早生まれのため、勉強についていかれても体力的についていけなかった。学校があまり面白くなくなっていた。低学年、小3ころまでついていけない、運動でついていけなかった。「まっちゃん、ついていけないよね」と、クラスの中でレベルの差が徐々に生まれ、学校に対する「疲れ」を感じた。決定的なことは小4で担任が替わったこと。少し学校批判になってしまうが、新しい担任のクラス運営はクラスの中にひとり見せしめを作る運営の仕方。一人落ちぶれた子どもに対し、担任は少し勉強をサボったり、忘れ物をしたりすると「まっちゃんみたいになっちゃうよ」と言い、クラスの中でけしかけた。徐々にクラス内で僕には何を言ってもいいという雰囲気ができ、クラス中のヒエラルキーが形成された。それによって他のクラスに比べ、僕のクラスには団結力が生まれてきた。それが、4、5月ごろ。10月ぐらいには、朝礼で担任が「友だちと思う人を書いてみよう」という指導があり、帰りに「僕を友達と思っている人の名前のリスト」を返却された。そこにほぼ白紙状態で、「僕には友達がいないんだな」と、とてもショックを受けたことがきっかけ。クラス側の言い分を補足するとしたら、担任がああいうことをしていたので、僕の名前を書ける状態ではなかったのでは、と感じる。そんな事件があり翌日から学校に行けなくなってしまった。それから2週間くらいすると、教室の友だちから手紙が来るようになった。僕には友達がいないはずなのに、毎週送られてきた。先生が書かせている手紙が毎週送られてきて、さらに人間不信になってしまい、なおさら学校に行かれなくなった。

また、自宅周辺にたくさんの退職された先生が住んでいて、外に出ると「学校に行かれないのは、親が悪い」と言われ、家を出るのもストレスになってしまった。

担任は月に1回くらい、プリントを持ってきてくれた。母は2人目の不登校だったのであまり抵抗はなかったが、そこで僕が許せなかったのは、「学校に来られないのは家庭のせい」「家庭に問題がある」と言われたこと。僕としては、「学校に原因があるのに」という思いがあり、中学に上がるくらいまで、学校の中にいる人に対する不信感、大人に対する

不信感になった。たまにスーパーに行って近所の友だちのお母さんに会っていると、目をそらしたり、お友だちの兄弟に「まさおくと遊んでいると勉強が楽しくなくなっちゃうよ」と言われてしまい、社会的認識がそういうものなのかと感じた。それは20年前くらいの話。

僕の話は20年前の話で鮮度が悪いが、僕の支援している場所で不登校の子どもたちの話を聞くと、今でも同じようなことが起きていることを聞いて、あまり現状は変わらないのではないかという印象がある。

不登校仲間の友人の話。ある女の子は家に引きこもっていて、彼女のクラスでクラス会議が開かれ、その結果を学級新聞に載せて廊下に張り出した。その子が学校に行かなくなってしまったことが学校に張り出され、それによって全校に不登校が知れわたり、さらに「学校からはずされてしまった」ことで不登校になってしまった。先生自身は真面目に考えてやったことだろうが、当事者の思いとズレがあったと今も昔も思う。

夏目座長：草深さんには苦しい思いを、勇気を持ってご発言いただき、ありがとうございました。

飯沼指導主事：南信地区で実施した不登校児童生徒の支援者の意見交換会について報告します。

この会は、学校の関係者、当事者、保護者、支援に関わっている人がそれぞれ思っていることを率直に話し合いたいという趣旨で実施。教育委員会から情報提供ということで話をしたあと、NPOのはみんぐのピアサポートスタッフの高橋泰宏さんのお話を伺った。高橋さんはかつて不登校を経験され、その後学校事務のお仕事をされ、現在は不登校の支援をされている。支援者の立場、当事者の立場、学校職員の立場という3つの立場からお話をいただいた。話を聞いた方々から「とても分かりやすかった」というご意見が多く、連携について当事者と絡めながら、学校視点から子ども視点への発想の転換が必要という話があった。「学校から子どもを見ると、ひとつの線しかないが、子どもを中心に置いた視点にすると、子どもを中心に学校、家庭、塾、自分の好きな場所（図書館等）、友だち、などたくさんのネットワークとつながっていて、ひとつの線が切れても他のネットワークがある。学校もさまざまなネットワークとつながることで学びの保障ができるのではないか」という意見があった。

その後、4、5人のいろいろな職種の人が入ったグループに分かれて、意見交換会を行った。その中で、保護者は何が不安かという、「学校にいけなくなった時になかなか情報がなくて困った」ということ、学校側も「少し情報を持っているが、学校が情報を伝えることで逆に支援から遠ざけてしまっているのではないかという不安があった」などそれぞれの意見を共有した。

また、保護者から「子どもが家にいると、本人は一見、何も考えてないように見えるが実は考えていて、保護者が悩んでいる姿を見てさらに落ち込んでいく。つながるところがなかなかなくてインターネットなどで探っても不安になり、もう少し情報を得られる方法が分かると違った展開になるのではないか」という話があった。学校外の活動に参加できて、徐々に学校とのつながりもでき、ひとつのアプローチだけでなく色々なアプローチから登校できるようになった事例もあった。

具体的な参加者は、教員20名、指導員等20名、民間の支援者5名、保護者が13名の参加をいただき、教員側もたくさん参加し、みんな関心があることが分かった。

夏目座長：それではこれから意見交換に入っていきたい。

まず、「基本方針の位置づけ～Ⅲ導き出された課題」までについてご意見、ご質問等いただきたい。

戸枝委員：南信での意見交換会がよい雰囲気の中で、それぞれの立場で話げできた。私が関わってきた「不登校を考える県民のつどい」が10年かかってもできなかったことは、学校現場の先生たちにも参加してもらって不登校について考える場をつくるということだった。今回、県教委と次世代サポート課がタッグを組んで教員の参加も呼びかけてくれたので、昨日の会ができた。やはり「行政の力はすごい」と思った。とてもよい雰囲気であった。

とてもよい雰囲気だったのは、基本方針の位置づけで「これまでの取組が間違っていたのではないか」「これまでの学びの場の支援が不十分だった」ということをようやく県教委、文科省も認めてくれ、それを明確に打ち出す強さ、柔軟さに感激。それまでは「不適応児」、「親が悪い」などの空気の中で周りの刺すような視線があり、昨日の会のような場に親が参加しても責められているようで落ち込んでしまった。昨日は、後半の分散会で、若い担任の先生の「不登校を出してしまって…」という悩みも聴き合い語り合うことができ昨日は非常に良かった。不登校を考える県民のつどいは幕を閉じたけれど、次につながる第一歩だったと思う。

基本方針の位置づけにある「これまでの取組は何か根本的に違っていたのではないか」の「何か」は何か。この「何か」を具体的に振りかえって明文化したい。親も不登校になると子どものためとそれまで接してきたのに何が間違っていたのかと悩み、親も支援者も先生方もしっかり見つめ直すことから学ぶ。それによって課題が明確になるのではないか。

夏目座長：「これまでの取組は何か根本的に違っていたのではないか」という言葉はかなり刺激的である。ここまで言うことが大事なのか。振りかえって見つめ直すということからはじまるとしたら、この部分が大切になるのか。

西森委員：こういうものを作るときに、当事者が抜けていることはとても問題。子どもによかれと思って大人が考えやってしまうことはたいへん危ないこと。草深さんに来ていただいたことは本当に良かったが、もっとたくさん当事者がいるのであるから、当事者にきくべきではないか。

草深さん：10 数年前サポートプランがあり、その頃僕は不登校真っ只中だったので親と参加させていただいた。あの頃から思っていたこととして、たくさんの大人の方が真面目に話をしてくれありがたかったが、当事者の声その頃あまり表面化していなかった。この人たちは誰の声を聞いて作っているのか、と疑問であった。僕がネットワークをつくる中で、多くはないが、自分の経験談を話したいという子が徐々に増えてきているので、これから各地で話をするのではないかと。

親にしろ、当事者にしろ、学校の先生にしろ、現場にいる人は常に苦しい。親としては何不自由なく育ててきて、何の地雷を踏んだのか子どもが突然学校に行かれなくなる。子どもにとって不登校は風邪をひくようなものだが、「今日学校行かれなくなった」という罪悪感。それに対し、先生方が一生懸命やってくれていることをわかっている。先生たちの大変さがあり、親たちもいろいろなことがあって、子どもたちもいろいろあって、本当

に子どもたちのことを考えられるほどの時間がないのではないか。

話ができる人は専門家である必要はなく、子どもたちに寄り添える人たちなら誰でもよいのではないか。そういう人たちもたくさんいるが、学校は教育現場だから専門家を入れたいというのが僕らからすると見えてしまうが、能力のある人たちがたくさんいるのにそういう人たちの意見を聴く機会もないのではないか。先生たちがもうちょっと話したり、遊んであげて楽しくなっていけば、こういうことにならないのではないか。

茅野委員：私は相談業務で子どもたちの相談を聴いている。その中で新鮮な話題がある一方、お話に向ったような内容もある。草深さんの、「先生たちがもっと遊んであげられれば変わってくるのではないか」という意見に対し、同意見である。不登校に関する促進、阻害要因にいろいろ関わっていて、それを考えていく中で先生たちの忙しさだけの問題だけなのか、もう少しこのことについて議論をしたいところである。

「これまでの取組は何か根本的に違っていたのではないか」の「何か」は気になっている。すべてが何か間違っていたわけではない。その取組で助けられた子ども、救われたケースももちろんあるはず。間違っていたことに対し「そうだ」と感じる人たちにとっては「足りない」「全然足りていない」と感じているのではないか。その中で感じていることとして「何か」というところに、子どもが変わるべき、子どもを変えよう、動かそうということとは違うのではないか。さまざまな相談を受けている中で、子どもの周辺にいる大人が安心安全な場所にならないと子どもは回復しない。子どもを何とかするという視点から離れて取り組んでいかなくてはいけないのではないか。

近藤委員：切ない気持ちで聞いていた。みんなの前で話していただきありがたい。とても学校を重く感じていらしたのだなと思った。

私は友達と遊ぶことが楽しくて学校に行っていたが、それほどまで学校を重く感じてしまう現代の仕組みがあり、子どもたちの視点をくみとって学校は考えていかなくてはならないと感じた。何か根本的に変えていかなくてはいけないのかなと感じた。どこかで楽しかったんだという思いをもってもらえる学校を考えていかなくてはいけないと感じた。

代田委員：改めてお話いただいたように、基本方針は不登校の子どもたち、経験者の意見がしっかり反映されるべきものである。

「これまでの取組は何か根本的に違っていたのではないか」という発言はとても刺激的。「基本的な考え方」のところにはこの文言は出てきていない。誤解というか、主語が誰か、「何か」というと何か、この言葉が独り歩きしないように慎重に扱いたい。

夏目座長：実際文章に載せることで誤解を生むのではないか。

三輪次長：冒頭の問題意識として捉えたもの。これまでやってきたにも関わらず不登校が増加しているという意味で根本的に違っていたのではないかという問題意識でスタートしている。今後、懇談会の中で「何か」が明らかになったり、今は主語として教育委員会が問題意識を持っているということであるが、主語をどうするのかということが議論されるとよい。基本方針のスタートラインでもある。それぞれの関係者が気持ちよく取り組んでもらわないと取組が進まないの、誤解がないようにしたい。

高橋部長：もう一点、加えさせていただきたい。あえて「間違っただ」でなく「違っただ」という表現に

している。どちらかが正解でどちらか間違いということではない。飯沼の話にあったように「すれ違ってしまったのではないか」というニュアンスもものせているので、なかなか伝わりづらい。それを含めて表現の仕方を今後考えていきたい。

田川委員：草深さんのお話を聞かせていただき、自分の教員人生を振り返りながら聞いた。集団・学級の凝縮性を高めるために、ある子どもを標的にしてというのは非常に衝撃的であったが、そこまでではないにしても自分の中の感覚として自分もそうしてきたことがあったのかもしれないと感じた。今、そこまでではないにしろ、集団はみんな同じでなくてはならないという同調圧力は学校の中にもある。

草深さんにお聴きしたいこととして、草深さんのお母さんとサポートプランをやらせていただいた15、6年くらい前の当時の不登校と今の不登校のお子さんが時代を経て何か変わってきているかお聴きしたい。

草深さん：僕らの世代はSNSがなかった。インターネットが出たばかりの頃で、チャットを使って楽しんでいた時期があった。

今はもっと簡単に話ができるようになってもっと人の生活が見えるようになった。人の幸福をいくらでも見られる。今の自分の状況と人の幸福をいくらでも比較できるようになって、地域と関係なく「自分はどうしてこんなに不幸なんだ」という気持ちに落ちこめる状況である。逆にそんなに重く捉えることはないのと思うことがあるが、ネットとかテレビでキラキラした他の人と比べて「自分はなんでこんなことになっているんだ」と比較が簡単にできるようになっている。

当時は、芸能人であったり、自分の生活圏の外にいる人の生活は見えなかった。想像ぐらいしかできなかつたのに、今はそれが見えてしまうためにいくらでも落ち込めてしまう。自分が不幸だと思ってしまうと自分を追い詰めることができる。実際に自分に降りかかっていること以上に、自分を傷つけてしまう。全くつながっていない子たちも孤独感を感じてしまい、なんで自分とはつながっていないんだろうと落ち込んで、よくも悪くも情報というものが左右している時代になっている。

夏目委員：前と今とで今のほうがネットにつながっているということだが、逆に言うと「自分と似たように困っている人がたくさんいる」ことにつながり、昔よりも孤独じゃないと感じる人が中にはいるのではないか。

草深さん：そういう人も中にはいると思う。

ただ、実際傷つけられた人というのは自分よりも傷ついた人を見たくない。ネットの中で知り合った、自分より傷ついた人の話は見ない。自分が一番苦しいと思っているところがあるので。つながってもつながらなくても変わらない。

西森委員：いろんな相談を受ける中で、中学生以上はそういうネットの相談もある。

小学生では、学校に行かれなくなると担任がクラスの子どもたちからの手紙を届けてくれたが、自分をいじめた子どもからの手紙も入っていたという例。子どもからすれば無神経な手紙で、担任からすると良かれと思ってやっているが、そこにすれ違いがあったりする。また、発達障がいにかかわって嫌なことを先生から言われてしまった、など相談がある。

今の草深さんの話を聞いていると昔とそんなに変わっていないと感じる。それはなぜかという、やはり同調圧力があって、みんなと同じでなくてはいけない時に、少し外れるとそれを排除しようとする力が働いている。自分のクラスにうまくはまっていない子に、先生が「あっちの教室へ行かせるぞ」などと言ったというようなことも聞いている。相談を受けていろいろ残念を感じる。

草深さん：多分、今話したことは僕の頃になかった要因。新しい子どもたちを苦しめている要因としてネットのことは増えているのではないか。

戸枝委員：子どもサポートプランを作っている頃から状況はかなり変わった。当時、「学校を休んでもいいんだよ」という声はなかった。子どもの置かれている状況はより深刻、夏休み明けの自殺の問題も含めて切羽詰った状況に子どもが追いやられている。15,6年くらい前は、親たちは不登校に対する社会的な偏見、世間体、学校の登校刺激から子どもを守らなければならなかった。ひとりじゃ守れないから親の会が生まれ、親同士が支え合いながら子どもを偏見から守ろう、学校からも守ろうという意識でつながっていた。教育委員会への対立感情も強かったこともあり、子どもサポートプランがうまくいかなかった。

今はそういつている場合ではない。社会の貧困の問題、愛着障がいという問題、相談を受ける中で普通といわれている子どもにも愛着障がいという問題もある。母親たちがスマホ育児をする環境や虐待によって脳みそが縮んだり、脳疲労、睡眠不足など問題が多様で、親が防波堤になれないケースもある。学校と親が連携して防波堤にならないといけない、つながらざるを得ないという状況になっている。深刻度が増している。だからこそつながりたい。

北澤委員：社会の状況に学校は反映・投影しているとなれば、今までだったら他の救い手があったが、学校がセイフティーネットの役割を果たさざるを得ないのではないか。一方で学校そのものがプレッシャーとなっていることはある。だからこそ学校の重みをもっと軽くできないものか。

基本方針の中の「多様な学びの場を整備していく」ことはもっともであるが、不登校の対応としての多様な学びの場でなくて、当たり前毎日学校に通っている子どもに対しても多様な学びの場が学校の外にあってもよいのではないのか。暗いうちに家を出て暗い中帰るのではなく、半日くらいで午後は別のところに行って仲間と活動できるぐらいの重みにしていけないと解決していかないのかと思うところもある。実現どうこうではないが。

また、草深さんの早生まれの話が印象に残った。特に低学年は、1年も生まれが違うようなメンバーで同じ内容で同じペースで活動するということに無理がある。国によっては、入学式がなくて学年に達したところから入学するところもある。

草深さん：日本は義務教育期間の9年間にとてもこだわる。「お宅の子いくつ」と聴いて「何年生」と答えるのは日本だけではないか。子どもの成長は年齢のほうが重要ではないか。

北森委員：不登校ということでやっているが、学校に行っても私たちのところに来る子どもはいる。お母さんが悲しむから学校に行くのだけれどと苦しんでいる子どももいる。不登校だけでなく、学校に行ってさえいればよいという子どももたくさんいる。

「みんなと一緒にじゃないといけない」ようなところからきている。不登校だけではない。「不登校」という言葉も良くない。変えてもよいのではないか。

草深さん：登校すること自体が選択になれば、不登校とは言わなくなるのではないか。そうなれば幸せ。学校自体が信仰対象になっていて、何を読んでも「子どもは学校に行くものだ」と書かれている。子どもたち自身も思っていて、そこから外れてしまうことは大人が描いたルールから外れることだと子どもたち自身が苦しんでしまう。

田川委員：ここから発信する基本方針は、学校とそれ以外という対立軸で作られている。「学校を変える」という表現でよいのか。「社会全体の学びのあり方をみんなで変えていく」ということを表に出したほうがよいのではないか。

戸枝委員：フリースクールとか居場所が不登校の子たちの受け皿ということでなく、本人や親がわが子をどこに行かせようかと学校と並列になって選べるとよい。選択可能な学びのスタイルとなっていけないと、学校に行かれない子どもという価値観から解放されないのではないか。

草深さん：学校の勉強に満足できないからフリースクールに行くという逆のパターンもある。

夏目座長：社会全体の学びとして見つめる視点がないとなかなか問題の解決につながらない。広いところから見る必要があるのではないか。選択の可能性として、「定時制に入学して途中でやめて、再び他の定時制に入学すると続きからできるのかと思いきや、また初めからやり直し支援がたいへんだった」という話を聞いた。単位制のように、単位をとっていれば学び直しをするにも途中からやり直せるなど共通基盤を全体で考えていかなければ。社会の問題として、社会の中の学びという意味で考えていくことは重要ではないか。

戸枝委員：「出席扱いにする」ということは、出席扱いにしないと卒業できないということなのか。その「出席扱いにする」ということが学校の権威につながり、学校のお墨付きとなってしまうのではなはないか。スタッフの中から、出席扱いのときの評定はどうなるのか、フリースクールに行っていたときに誰がこの評定をつけるのかという質問があった。そのことについても検討しないといけない。

近藤委員：社会的に学校でなくてはダメだという認識がある。その中で、不登校という言葉が本当によい言葉なのか、昔は登校拒否であったが、いつから不登校となったのか。そうではない所で学ぶ場所があってもよいと並列的になるとよい。学校というものが明治以来重きを置かれ、社会的に地位を得て進んでいくために組織付けられたことについて、意識を変えていくことはとても難しい。もともと寺小屋と言っていた時代、学校はなかった。寺子屋で学んでいたことはそれぞれ違っていた。学んでいる中で、自分自身を見出せていられる何かがあるとよい。

夏目座長：続いて、これから「IV基本的な考え方～V施策の方向性」についてご意見をいただきたい。

西森委員：私のところに来ている子どもたちの中で、中学生が高校を目の前にして高校から自分をリセットしたいのに、学校に行っていないからアスタリスクがつくから普通高校に行かれないと言われたとってくる。だいたいの子どもが通信制や入りやすい高校を選んで入学している現状。世の中にルールが作られていて、中学を卒業して高校に行かないと就

職が難しいという現実がありみんな苦しい。そのことを長野県プランで変えることができるのか。

三輪次長：高校入試制度をどうするのかという問題はある。アスタリスクがついたとしても普通高校に入学ができないことはない。学校との連携が足りないことが問題。仮に評定をつけてよいのかということに問題がある。テストだけ受けて評定をつけるとなると評定が出ないこともある。むしろ、アスタリスクにして「こういう学びをしてきた」ということを高校に示したほうがよい場合もある。まだ検討しているところであるが、新しい高校入試制度改革でも中心に据えて考えたいと思っている。

西森委員：学校ともっと話をしていきたいが、「そんなに学校を休んでいると高校にいけなくなりますよ」と言われることはまだある。一般的にルールができていて、手伝いに来てくれる学生の中に、小中高一切行かなくても高卒認定試験を受けて信州大学理学部に入学した子どももいる。いろいろな生き方があるということを知らせてあげたいが、圧倒的多数はルールに沿って行かなくてはいけないということに縛られて生きている子どもが多い。

三輪次長：きちんと情報を共有していかななくてはいけない。

もうひとつ、草深さんのお話を伺っていても、人権感覚、子どもの権利としてどうなのかを認識しておかないといけない。

西森委員：先生に言われてしまったことに対し、上下関係があると感じていて先生に言えない。「疑問に思っていることを言えば」と言っても言えない、対等ではない。上の人から言われたという思いが子どもにも、親にもある。

夏目座長：親と学校とつなげる役割、親と民間施設がつながるための情報はどうしたらよいか。学校が認識してくれるようになったのは、どのような努力や経過があったのか。

西森委員：情報をコマーシャルすることができるようになってきた。病院の先生やさまざまところで、「学校に行きづらいならここに相談するといいよ」「ここに行くと元気になるよ」と言ってくれるようになった。最近では、学校も認識してくれるようになってきた。

子どもたち自身、元気になってくると、あんなに行きたくなかった学校なのになぜか戻りたくなってくる。わたしのところに来ている子どもをみると、多めに見て学校復帰率は9割ぐらいになっている。子どもたちは自分のエネルギーがたまると元気になってくると学校に行ってみようかなと思うようになる。そのことを学校が少しずつ認めてくれるようになり、学校が見に来てくれるようになった。支援会議にも呼ばれるようになった。実績を通じて学校とつながれるようになった。

草深さん：先生たちは忙しくて対応しきれないことがあるが、先生が不登校の知識について民間側からひろうことはできないのか。先生たちが疲弊している。先生たちが僕らの話を聞く対応する先生が動きやすくなるのではないかな。

夏目座長：先生たちは忙し過ぎて、学校の中で抱えてしまうと学校の問題として考えすぎ、相談せずに学校で何とかしようと自己完結型になっているのではないかな。

戸枝委員：かつて中学校で支援員をしていたことがあるが、学校に入っても不登校の学習会は一切ない。すぐにこの子とこの子は不登校だからといって支援が始まる。不登校の知識が「0」でもなれてしまう。学校に連れてくればよいと考えてしまう人もいる。仕事として考え

てしまう人もいます。養成講座をして、適性をみて支援員になってもらうというシステムが必要ではないか。それと同様に教育支援センターに配属される先生も、学校の先生をやっていたから不登校支援ができるというものではない。教師として指導力があるから支援ができるということではない。指導と支援は違う。

昨夜来ていただいた先生方はとてもよい方々ばかりであったが、先生方は忙しい。こういうことが起きている、不登校の対応が変わってきているという研修、校内研修が必要ではないか。

先生方が「学校に毎日来ないと高校に行かれないよ」「テストを受けていないと高校受験ができない」など間違った情報を持っている。正しい情報を親に伝えていない先生が多い。さらに、先生達は2,3年で転勤するから地域の情報ももっていない。教育事務所でも持つておく。「辛かったらこういう所がある」という情報を持って在学中に子どもたちに伝えていく仕組みを作っておくとよいのではないか。

夏目座長：指導と支援は違うのではないかという意見、研修が不足している、正しい情報が不足しているというご意見についていかがか。

西森委員：中間教室にいる先生方の問題も確かにある。ただ、中には勉強をして学校に戻すことがよい子どももいる。学校に行かなくても静かなところで勉強ができるからと言って中間教室なら勉強ができるという子どももいる。その子にとって合う場所があるということがよいのではないか。

近藤委員：どうやったら学校に行きづらい思いを消すことができるのかを焦点とすると、7頁に集約されていくのではないか。今、教育委員会で伝えていることは、一斉一律の授業から脱却して一人一人の子どもの発達に合わせた授業づくり。その後の選択肢をたくさん用意していないといけない。逆に例えば5,6歳時や幼年期のときから選択肢を用意する必要があるのではないか。

代田委員：大きな方向性はよくまとめていただいている。

個人的な意見であるが、8頁の1の(1)に「不登校は問題行動ではない」という表現がくることに違和感がある。大きな問題で捉えると、ダイバーシティ、多様性を認めてインクルージョンするという相互理解、お互いのよいところを認めあえる社会の啓発であり、不登校だけ取り出して問題行動ではないという意識の醸成というのでは、ちょっと捉えが小さいのではないか。

1番目に書くのであれば、相互承認、相互理解、多様性、まとめていくという意識啓発ということが必要。そうすると「学校を変える」という流れにつながるのではないか。

ただ、「学校を変える」というより、そもそもできていないことが多いのではないか。昔から学級経営や授業づくり、子どもたちを認め合うことはしている。回帰するというか、10年前に策定された「授業の3観点」が徹底されていたら、学力不振による不登校は減ると思う。これに加えて本来あるべき授業づくりに立ち返っていただきたい。

3番目の「多様な学びの場の充実」の中に「地域」という言葉も入れていただきたい。飯田市の取組の中でも農園に行ったり、公民館に行ったり、高校で始めていることだが一般企業の会議室だったりというところもあり、地域連携の学びの場についても入れて

いただけるとうれしい。

4 番目の「継続的に協議する場の設置」についても、続ける仕組みとして何が足りないのか、課題の解決をしたい。幼保の連携、高校と自立に向けた連携、小中の連携にこだわりすぎず、幼児教育、子育て、高校、就職、自立に向けた協議の場も入れるべきではないか。

草深さん：私のところでは小学生から 30 歳まで支援している。福祉の分野、中学を卒業した後の支援がなかなかない。その後どうなるのかということがよくわからない。高校年代、15 歳以上の生活の追跡ができるともっとよい。

西森委員：私も賛成である。小さい頃からもっと先までの途切れないものがないかと思う。夜間中学の事も含めて考えていくべき。現在、企業の人に関わって居場所をつくっていけないかを模索している。そういうことを同じ土台で一緒に考えていかないといけないのではないか。

夏目座長：社会全体の意識の啓発にある「不登校は問題行動ではないという意識を誰もが持つ」ことに違和感がある。不登校は自分自身を守るためには時には必要な手段である、というようなニュアンスがあったほうがよいのでは。選択肢の問題として、行かないことを選択するときには身を守る上で必要な手段であるという表現も必要なのではないか。

7 頁にある基本的な考え方にある「マイナスイメージを払拭する」という表現が、これはダメだという前提から入っている。プラスのイメージを作るという言い方はできないか。選択の中では学校以外の多様な場もあり得るという発想が必要では。

茅野委員：8 頁の表現について、不登校は取り組むべき課題であるが、子ども個人の問題行動ではない。誤解を生じさせないように発信していきたい。

マクロな視点としては、多様性、社会全体の学びの場、子どもが育つ環境としての地域、大人そのものが子どもの環境であるから大人そのものからどう変わるかを示していかれるとよい。

それを踏まえて、ミクロに何ができるのかどうしていくのかを考えていくべき。不登校の捉え方、切れ目のない支援の中での引きこもりの課題、事業所と連携しないといくら多様な学びがあってもその後の自立につながらない。それを作ることの重要性、教育と福祉で具体的にどうしていくか考えなくてはいけないのではないか。

子どもの環境で、学校が本来やってはいけないことをなくすということを後回しにしてはいけない。草深さんの先ほどの話は今でも学校で起きていて、このことは真摯に受け止めて改善すべき。

8 頁「学校を変えていく」に関するエビデンスについて、研究は不登校の状況にある子どもに行くことは難しい。学校に登校している子どもに対して不登校の傾向、登校への動機付け、学校への適応など子どもが自覚しているものを表現したものの範囲ということ的前提に研究したときに、自己決定理論の中に、より自律的な内発的動機付け、より自律的なものから同一化、取り入れ、外的という段階がある。そのうち、一番内発的なことは「学校が楽しい」、「新しいことを教えてくれるのが楽しい」、「勉強が面白い」ということが動機の主たるものである。一番、外的なところにあるものの中に「行かな

いと近所の人に褒に思われる」がある。

小学生のデータで、外的な動機付けで学校に行っている子どもたちの不登校傾向を低めるときは、学業がフォローされることしかよいデータが出ない、先生との関係がうまく築けてもなかなか回復しないというものがある。動機と不登校傾向、学校適応感は関連がある。小学校、中学校でも違いがある。

あくまでも研究ベースにのった範囲の話であるが、その部分を捉えつつ学校の中で本来大切にしていかななくてはならないことを改めて考えたい。

田川委員：「学校を変える」というメッセージがどういう風に伝わるかということを考えておいたほうがよい。学校を変えることは目的ではない。学校の学びのあり方を変えることが目的。

(1)、(2)も1例であって、これを行うことが解決につながるかということこれはあくまでも手段であり、何のためにそうするのかということをしっかり書かないと誤解が生じるのではないか。

高橋部長：10月の文科省通知「不登校児童生徒への支援のあり方について」をどのように学校現場で受け止めているのか、お聞かせいただきたい。

北澤委員：基本的な方向については了解ができたと思われる。職員会議でも扱わせていただいた。前回もお話したが、学校側から「学校復帰を前提としない」ということを表立って言ってよいのか考えると難しい。

いじめに起因するという部分の柔軟な学級替えや転校の措置を活用するというのもなかなか難しさがあるのではないかと思う。国が変わろうとしていることは十分理解できる。

代田委員：校長会、教頭会等で触れるようにしているが、現実問題として10月という時期に何か大きく変わるかということ具体的に変わるということではない。国もそういう流れになっているのかという受け止めになるのではないかと感じている。国の出したことに意義はあり、受け止め方はすぐには変わらないが、頭の片隅に残るメッセージではないか。

近藤委員：大事な通達が出たと感じている。具体的にそれをどういう場面で子どもと相対したときにどう扱うかということは、今後研修を積まないといけないと感じている。

夏目座長：色々なご意見をいただいた。

不登校の子どもたちの前に、いきなり選択肢を並べられても困るだろう。基本は大人が寄り添うことが必要。大人、先生、地域のサポートシステムなど、かかわりの中で選択肢を広げていかれるとよい。

7 まとめ ○高橋 功こども・若者担当部長

8 事務連絡